

2023（令和5）年度 東北アジア研究センタープロジェクトユニット報告書

提出 2023(令和5)年3月25日

代表者 高倉浩樹

(本報告書はセンター内外への公開を原則とします)

研究題目	日本語：マイノリティの権利とメディア研究連携ユニット 英語：Research Unit for Minority Rights and Media	
研究期間	2023（令和5）年度 ～ 2028（令和10）年度（6年間）	
研究組織 (センター教員・兼務教員・教育研究支援者、RA等[退職した教育研究支援者等は雇用期間を記して記録すること])	氏名	所属・分野・職名
	高倉浩樹●	東北アジア研究センター 人類学 教授
	岡洋樹	東北アジア研究センター 歴史学 教授
	川口幸大	文学研究科 人類学 教授(兼務教員)
	越智郁乃	文学研究科 人類学 准教授(兼務教員)
	ボレーセバスチャン	災害科学国際研究所 人類学 准教授(兼務教員)
	志宝ありむとふて	東北アジア研究センター 思想史 特任助教
内藤寛子	東北アジア研究センター 政治学 客員研究員(アジア経済研究所)	
外部評価者	氏名	所属
	吉田睦	千葉大学文学部・教授
	上水流久彦	広島県立大学・地域基盤研究機構長・教授
	ブレンサイン	滋賀県立大学人間文化学部・教授
センター支援	センター長裁量経費	10万円
	教育研究支援者(RA)	無
	研究スペース	無
ユニット組織設置目的と本年度の研究事業の成果の概要 (600-800字の間で専門家以外にも理解できるようにまとめてください。 Webなどで公開を予定しています。)	<p>本ユニットは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構(NIHU)「グローバル地域研究事業東ユーラシア研究プロジェクト」に参画する東北大学における拠点として、国立民族学博物館・北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、神戸大学国際文化学研究推進センターとが連携し、東ユーラシアの文化衝突とウェルビーイングに係わる学際的・国際的研究を推進するものである。</p> <p>このプロジェクトで我がセンターは、「マイノリティの権利とメディア」を分担テーマとする。具体的には、巨大国家である中国とロシアを抱える東北アジアでは、権威主義体制と民主主義体制の国家の双方が存在し、国家・企業・市民が相互に影響を及ぼしながら社会が作られている。本ユニットは、マイノリティの権利とメディアに焦点をあてながら、この地域にみられるグローバリズムの特徴を明らかにしようとするものである。</p> <p>ユニットでは上記の東北大拠点のメンバーとともに定例セミナーを行い、メンバーを中心とした会と外部講師を招いた形で8回行い、さらに公開講演会とワークショップを行った。このことによってロシア・モンゴル・中国におけるマイノリティの生成と権利の阻害について、拠点内のメンバーの研究進捗状況を把握することができた。また新疆ウイグルの信仰をめぐるメディアと権利についての外部講師を招いた研究会を開くことで、新しい研究者との交流ができた。こうしたなかで災害・戦争・政治的緊張においてマイノリティが生成されていること、その社会過程においてソーシャルメディアが重要な役割を果たしていることがわかった。</p> <p>拠点内外の研究者との交流の結果、ウクライナ侵攻に関わる共同研究を拠点間で実施する合意ができ、これを科研費Aとして申請し、採択された。</p>	

<p>活動報告（研究集会や講演会などのプログラムを記してください。共同研究報告書に記載済みは除く）</p>	<p>国際交流については、ロシアと中国に跨がるマイノリティとしてモンゴル系ブリヤートやモンゴル、ツングース系のエヴェンキについて、東北アジア研究センター客員准教授シャルロッテ・マルキナ（フランス・東洋言語学院・人類学）「Human-animal communication and collaboration among nomadic herders of Mongolia and South Siberia」（12/19）、客員教授のドナタス・ブランディサウスカス（リトアニア：ヴィルニウス大学・人類学）による「Agreements with bears: Evenki reindeer herders and taiga conviviality」（3/21）による講演会を実施した。東ユーラシア研究プロジェクトの国際シンポジウム「境界地域、ジェンダー、移民」においては、ウクライナ問題を取り上げ、ウクライナにおける女性の戦争関与についてのセッションを北大拠点と共同開催した。 最後に公開講演会「ロシアによるウクライナ侵攻を契機に庇護希望者・難民を考える」（2/10）を実施し、国際人権法・政治哲学などの専門家を招へいた成果を発信した。これらを含め、他の拠点との共同でおこなった全体集会や国際シンポジウムによって、東ユーラシア研究において、ロシアによるウクライナ侵略に関わる問題が共通の課題として議論すべき事象になっていることを確認した。 共催事業としては、公開講演会「ユーラシアにおけるムスリムの移動と文化の様態」（2/17）、ワークショップは「戦争記憶研究の新展開を探る」（3/4）を行った。</p>		
<p>本年度のユニット運営を通じた実現した東北アジア研究センター組織への貢献についてアピール</p>	<p>連携ユニットとして、北海道大学、神戸大学、国立民族学博物館と共同して、拠点間研究会、全体集会、国際シンポジウムをおこなったことは、東北アジア研究の機関連携の強化について寄与することができた。また東北北大拠点の研究協力者を主な対象として、国際学会派遣支援と調査旅費支援を行い、その結果、10月にインドで実施された国際人類学民族学連合（IUAES）の第19回世界大会に派遣ができた。また北海道アイヌにおける人権状況についての調査が可能となった。また研究協力者を全体集会のプログラムとして実施された若手研究集会で発表させ、本拠点から2件の発表をさせることができた。また本拠点の研究協力者は人間文化機構若手研究者海外派遣プログラムに応募し、2024年度にベルギーの大学に短期派遣されることとなった。これらは次世代支援機能を東北アジア研究センターが発揮していることを内外の研究者に示すことになった。</p>		
<p>外部資金 （名称・金額）</p>	<p>受託事業グローバル地域研究（人間文化）</p>		<p>総額 727万 円</p>
<p>ユニットが 運営する共同研究</p>	<p>ウクライナ侵攻後のロシアからの大量出国とモンゴルにおける民族間関係</p>		
<p>ユニット主催の研究集会・企画（共同研究報告書に記載していないもの）</p>	<p>研究会・国内会議・講演会など：11 回</p>		<p>国際会議： 1 回</p>
	<p>研究組織外参加者（都合）： 100 人</p>		<p>研究組織外参加者（都合）： 40 人</p>
<p>学際性の有無</p>	<p>有</p>	<p>参加専門分野数：</p>	<p>分野名称：人類学、歴史学、思想史、文学</p>
<p>文理連携性の有無</p>	<p>無</p>	<p>特記事項：</p>	
<p>社会還元性の有無</p>	<p>有</p>	<p>内容：公開講演会「ロシアによるウクライナ侵攻を契機に庇護希望者・難民を考える」（2/10）</p>	
<p>国際連携</p>	<p>連携機関数：</p>	<p>連携機関名：</p>	
<p>国内連携</p>	<p>連携機関数：7</p>	<p>連携機関名：北海道大学、国立民族学博物館、神戸大学、鹿児島大学、中央大学、東京都立大学、アジア経済研究所</p>	
<p>学内連携</p>	<p>連携機関数：2</p>	<p>連携機関名：文学研究科，災害科学国際研究所</p>	
<p>教育上の効果</p>	<p>参加学生・ポスドクの数：4</p>	<p>参加学生・ポスドクの所属：環境科学研究科、鹿児島大学</p>	
<p>第三者による評価・受賞・報道など</p>	<p>なし</p>		

ユニット運営計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	連携ユニットとして人間文化研究事業との協働を実質化するための科研Aが年度末に採択に至ったのはよかった。これを基盤に次年度は、ユニットと東北大拠点との連携および拠点間における連携を本格的に展開する。また基幹ユニットの支援としてえられる学術研究員について、2024年度から雇用することが確定した。次年度は新しいメンバーも含めた研究組織で実施する。
最終年度	該当 [無]

*ファイル名はUnitRpt_年度_代表者ローマ字（例 UnitRpt_2020_takakura）とする。

<最終年度報告>

ユニットの最終年度には、数年間にわたる組織運営事業を全体を通して何を達成したのか、また東北アジア研究センターにとってどのような貢献があったのか、600-800字程度でまとめてください。図版不要。Webで公開します。

獲得外部資金一覧 (年度、名称、金額)	
------------------------	--